

I・HEAP (対象 : Clark, A., & Peck, C. L. (Eds.). (2018). *Contemplating historical consciousness: Notes from the field* (Vol. 36). Berghahn Books.)

担当 : 空 健太 (国立教育政策研究所)

sora@nier.go.jp

「ホロコーストの教訓は現在も続いている」 : ユダヤ人のホロコーストの歴史から意味を見出す

Part III. Historical Consciousness and Cultural Identity

CHAPTER 12 “There Are Current Lessons from the Holocaust”: Making Meaning from Jewish Histories of the Holocaust

■ 著者情報

ジョルダナ・シルバーシュタイン (Jordana Silverstein)

- ・メルボルン大学歴史・哲学研究科博士研究員
- ・ARC Laureate Fellowship Project 「Child Refugees and Australian Internationalism: 1920 to the Present」に参加。
- ・このプロジェクトの一環として、ジョルダナは1970年から現在までの子どもの難民に対するオーストラリア政府の政策の歴史を調査している。
- ・これまでの研究では、帰属意識、ナショナリズム、アイデンティティ、歴史学、セクシュアリティ、記憶などの問題に焦点を当て、主にオーストラリアのユダヤ人の歴史という観点から調査を行っている。



(写真は、<https://theconversation.com/profiles/jordana-silverstein-14076>)

■ 代表的な著書

- ・Silverstein, J. (2015). *Anxious histories: Narrating the Holocaust in Jewish communities at the beginning of the twenty-first century*. Berghahn Books.
- ・Slucki, D., Jilovsky, E., & Silverstein, J. (2016). *In the Shadows of Memory: The Holocaust and the Third Generation*. Vallentine Mitchell.

■ 用語

- ・memory studies | 記憶研究
- ・lieux de memoire | 記憶の場
- ・postmemory | ポストメモリー: 後世の人々が、直接記憶することはできないが、物語やイメージ、行動を通して知ることができる祖先のトラウマとの関係。Marianne Hirschによる用語。
- ・recollection | 思い出
- ・deconstructive analysis | 脱構築的な分析
- ・signifier | 記号表現

■ 概要

この章は、ホロコーストのような出来事の経験によって歴史意識がいかに形成されるかを明らかにしようとする。特に、著者が行ったニューヨークとメルボルンのユダヤ人学校における調査が基になった『不安な歴史—21世紀初頭のユダヤ人社会におけるホロコーストの語り—』(2015) から、ユダヤ人コミュニティにおける歴史意識の形成について考察している。

■ 議論の提案

1. 本章で説明されるように、特殊なコミュニティにおける教育がある特定の歴史意識をもたらすことを認めると、見えにくいだろうが、各地域・各学校によってもたらされる歴史意識の違いもあるのだろうか？
2. 1があるとする、日本の地域性による歴史意識の違いはどのようなものが見られるのだろうか？

■ 構成（※本文にはないが便宜上作成）

1. 著者の経験と研究 2. 研究の方法と視点 3. 研究内容 4. 結論 （各節も作成）

1. 著者の経験と研究（パラグラフ1～）

(1) 著者の経験

- ・ホロコーストの歴史やその余波は、世界中の学者の関心を集め、膨大な研究成果を生み出してきた。
- ・著者もまた、メルボルンとニューヨークのユダヤ人コミュニティにおけるホロコーストの歴史について研究し、2つの都市のユダヤ人学校でホロコーストの歴史がどのように教えられていることについて研究を行った。
- ・著者自身がホロコーストのサバイバーの第3世代である。

(2) 博士号の研究

- ・博士号の研究から、ユダヤ人の歴史に関する『不安な歴史—21世紀初頭のユダヤ人社会におけるホロコーストの語り—』（2015）を出版した。
- ・研究上の問い：「ジェノサイドと大量虐殺の終決を目指すホロコーストの教育学・記憶・歴史とはどのようなものか？」「かくして、『記憶の場（lieux de memoire）』の一つの形態であるホロコースト教育は、どのようにして大衆に向き合い、行動するようになるのか？」

(3)ホロコーストの教師へのインタビューの過程での気づき

- ・教師にとってホロコーストを教える意味
 - 生徒たちに異なる未来をもたらすこと
 - ユダヤ人にとってどのような意味を持つのかを考えさせること
- ・ホロコーストの物語を生徒に伝えることは、これからの世界におけるユダヤ人の地位への懸念から生み出されたものだった。
- ・ニューヨークのある教師のインタビュー「私たちは、生徒たちがこの記憶をどのように生かしていくのか、そしてそのために何をすべきなのかを考えている」

=ホロコーストの記憶から、何かを理解して取り入れ、何らかの行動を起こすことを期待。

→教師にとって難しい要求を突きつける。

(4)『不安な歴史』（2015）の概要

- ・メルボルンとニューヨークのユダヤ人学校で教えられているホロコーストの歴史は、どのような働きをしているのか？
- ・どのような授業が教えられているのか？
- ・どのようなアイデンティティーが調整され、形成されているのか？
- ・ホロコーストの深く恐ろしい恐怖とその後遺症はどのように処理されているのか？
- ・これらのユダヤ人学校では、ホロコーストは何を意味するように仕向けられているのか？

→ホロコーストの歴史は、単なる冷静な歴史ではない。異国の地や異民族の授業ではない。教師がホロコーストについて教えるとき、生徒は自分自身と生徒の何かを教えているのだと感じる。このことが何を教えるのかを決定する。

- ・ホロコーストの教授は、記憶の場であると同時に、ポストメモリー（postmemory）の事例であり、ホロコーストに関するユダヤ人の記憶を未来に向けて生み出し、それによりユダヤ人にトラウマ的に染み付いた歴史意識を作り出している。

ポストメモリー（postmemory）

- ・マリアンヌ・ハーシュ（Marianne Hirsch）による用語
- ・後の世代に遅れてもたらされる記憶を表す
- ・「自分が生まれる前の物語に支配されて育った人々の経験の特徴づけるもので、理解も再現もできないトラウマ的な出来事によって形成された前世代の物語によって自身の遅れた物語は押しのけられている」
- ・「ポストメモリーは、対象やソースとのつながりが、思い出ではなく、想像力を駆使した投資や創造によって媒介されるという点で、実に強力で非常に特殊な記憶の形態である」

(5)ユダヤ人学校の位置

- ・ユダヤ人学校は、世界中で、ユダヤ人の歴史、文化、宗教を学ぶ場として、また、ユダヤ人の社会性を形成する場として、新しいユダヤ文化を創造し、古い記憶や歴史を継承する場を提供している。
- ・メルボルンとニューヨークでは、ユダヤ人学校の位置付けは異なるが、どちらの場所でも、ホロコーストによって世界のユダヤ人の生活と歴史が根本的に変わったことを認識してもらうために、重要な役割を果たしている。

2. 研究の方法と視点 (パラグラフ9～)

(1)研究の視点

- ・著者の研究、『不安な歴史』(2015)は、ホロコーストの歴史の説明や、よりよいホロコースト教育の在り方の探究といったものではなく、ホロコースト教育を歴史学的に考えることに重点を置き、歴史的な語りの体系を明らかにし理解することを目指した。
- ・教師たちの語りは何を生み出しているのか？

(2)プロジェクトの進め方

- ・2006年にメルボルンとニューヨークのユダヤ人学校で実施されたホロコースト教育のカリキュラムと、教師へのインタビューを基に、歴史的な物語の探究を行った。
- ・ホロコースト教育の一般的な状況についての情報を提示したものではなく、調査に参加した12の学校とその学校の15人の教師とのやりとりを通じて生じたいくつかの疑問や考えを進めたものである。

(3)関わった学校や都市の相違

- ・学校によって、ユダヤ人に対する宗教的あるいは政治的なアプローチが異なっている(例:NYの学校は正統派の学校が多いが、メルボルンの学校はより世俗的な学校)。
- ・メルボルンにはホロコーストのサバイバーの子孫が多く在籍し、NYにもいるがメルボルンほどではない(両都市の歴史の違い)。

3. 研究内容 (パラグラフ14～)

(1)発見

- ・2つのユダヤ人コミュニティには規模や多様性など多くの違いがあるにも関わらず、ホロコーストについての教え方がごくわずかな違いしかない。教える方法の違いは、教師個人や学校の特長性に基づく。
- ・インタビューした歴史教師の大多数が生徒に提示するホロコーストの物語が、解放という「ハッピーエンド」に向かって進んでいき、通常、ユダヤ人国家イスラエルの建国という結末を迎える。インタビューで、教師たちは繰り返し、驚くほど似たような物語が教えられていることを話してくれた。

(2)考察=類似した物語の意味

- ・NYとメルボルンの2つの異なる場所では、2つのイデオロギーが教えられる歴史を構成している。
 - ・入植者による植民国家に位置していること
 - ・全ての学校の全ての教師が、教育の基盤として強いシオニズムの感情や考えを表明していること
- ・さらに、大衆文化や博物館、教師教育コースなどによって、ホロコーストの物語が何年にもわたって公に作られてきた結果、この2つの場所の教師は、若いユダヤ人に向けた物語を作り上げていた。
- ・この物語は、証言や一次資料、記憶や歴史研究に基づいているものの、モダニズムの手法にも基づいており、ユダヤ人共同体の歴史・記憶・未来についての感覚を生み出すことに役立つものである。

(3)ホロコースト教育の目的

- ・教師にとって、ホロコーストから生徒に学んでほしいこと

<教師1>

今の生徒たち、つまりユダヤ人の子供たちが、アメリカが非常に民主的な社会であるのと同様に、ホロコーストの黎明期の生活もそれぞれの社会で同じように民主的であり、ホロコーストという性質の災難が起こったということを理解することです。子供たちが21世紀のアメリカ社会に満足し、安易に考え始めていることは、実際には全くの神話であることを理解することが重要だと思います。そし

て、ホロコーストが起こった要因、状況、外界からの反応や反応のなさを理解する必要があるのです。また、ホロコーストの犠牲者が何を失ったのかを理解しなければなりません。

<教師 2>

喪失感。単に「昔、ここにユダヤ人が住んでいた」というような抽象的な話ではなく、損失を感じてもらいたいのです。何が失われたのかを知ってもらいたいのです。東欧にも西欧にも、豊かで活気のある生活がありました。... (中略) ...子供たちには、失われたものを理解してもらいたいのです。また、「Never Again (二度と起こさない)」というスローガンは、実際に実現されているのでしょうか？多くの子供たちが、今日は危険な世界に生きていると感じています。反ユダヤ主義には常に注意を払い、ホロコーストから現在の教訓があることを認識しなければならないと思います。

- ・教師たちは、ユダヤ人の生活や思想を占めるホロコーストの歴史を用いて、生徒が自分の人生を歩むために必要な歴史の感覚を作り出す方法に取り組んでいる。

4. 結論 (パラグラフ23)

- ・学術的な理論に意識的に基づいているわけではないが、これらの教師とその教育法は、ユダヤ人の生活におけるホロコーストの機能と位置づけに関する広範な会話の一部として捉えられる。
- ・このような観点から教師たちの言葉やカリキュラムを調べてみると、ホロコーストを教えるのに真に適切な方法は存在しないことがわかる。どのような物語も、どのような表現方法も、何らかの点で不十分である。歴史を物語の中に封じ込めたり、一連の記号表現に頼ったりする表現の問題は永遠に残る。
- ・今回の研究では、21世紀初頭のメルボルンとニューヨークにおけるユダヤ人のアイデンティティが、ホロコーストに関するユダヤ人の歴史から全面的に情報を得ているという点について、新たな学びの可能性を提供した。
- ・このような新しい歴史や歴史記述が作られていることを検証することで、移民グループやジェノサイド後のグループがどのように自分たちの周縁性を調整しているかについて多くのことを理解することができ、そのような周縁性に付随する痛みや可能性を把握することができるということが明らかになる。

※参考文献は省略、本文参照。